Humanities= 人文学、Astronomy ＝天文学？
―人文学を捉えなおす―

難波美和子

「人文学」という学問領域がどのようなものとして捉えられているのかを考えてみたい。「人文学」とは、まず教育制度のなかの分類様式であり、考える枠組みである。「学科目はわれわれの世界の見方に応じて構築される」[1]とするならば、現在の「人文学」はわれわれの世界観の変化を反映していることになる。人文学の枠組みを再確認することで、世界の捉え方を見直してみよう。

1　人文学と天文学

いうまでもなく、日本語の「人文学」という言葉は、明治時代にヨーロッパの学問領域の概念である Humanities を翻訳したものである。「人文」という語彙は漢語からとられており、「人のありよう、倫理」を意味した。Humanities は、ルネサンス期以来、古典言語、つまりギリシア語、ラテン語などの文献研究を指したが、近代の学問領域の成立過程のなかで、自然科学と区別した、文学、哲学、芸術などを包括する領域として考えられるようになった。現在では、一般に、文学、言語、哲学、芸術、歴史、神学、音楽を自然科学、社会科学と区別して用いられる用語とされている[2]。日本でも、おおむねこのような理解に基いて用いられている。

「人文」と対になる言葉に「天文」がある。これは「天のことわり、摂理」を意味し、天体の現象をいう。そこから天体の現象から吉凶を占ったり、暦法を考えることや、それを行う人を指す言葉となった。この言葉は Astronomy の訳語としての「天文学」に用いられたが、もとの言葉の意味から言えば、Astrology に近い。日本ではこの学問領域は始め、オランダ語を経由して「星学」と訳されていたが、やがて「天文学」に落ち着いた。Astrology の訳語は「占星術」である。

「人文学」が人間の活動や存在に関する様々な分野全体を指すのに対して、「天文学」は自然科学の一分野を指す名称であって、非対称にみえる。しかし、現代の「天

1　イーグルストン(2003). 25.
2　Cuddon, (1998), 402.

文学」は天体の観測から導かれる宇宙の構造や歴史までを数学、物理学、化学、さらには生物学までを含む領域となっている。

2　人文科学と自然科学

学問領域の名称について、もう少し考えよう。現在のわれわれが考える学問領域のほとんどは、ヨーロッパで 18 世紀の終わりから 19 世紀に成立してきたものである。たとえば English が現在のわれわれが考えるような研究領域、つまり「英語で書かれた文学（詩や小説など）を研究したり教育をすること」として確定するのは、第 1 次世界大戦末期のことである。イギリス文学も、イギリス文学について語ることも存在したけれども、イギリスで研究領域として認識され始めたのは 19 世紀末だった。教育領域として認定されるのは 19 世紀始めのインドである。イギリス文学はまずは他者 (インド人) にイギリスの文化を内面化させることで馴化するために、ついでイギリス文化内部の他者（労働者階級）をイギリス文化に同化させてナショナル・アイデンティティを身につけさせる目的で教育された[3]。一方で、大学教育における English は長く言語学 Philology であって、文学作品の内容や解釈を行うものではなかった。言語学としての English は英語の歴史や変化を文献的に研究するもので、文学作品は実例として利用された。

もともと Literature には、歴史、地理、言語学、伝記、哲学、社会学、政治学、科学その他のものが含まれていた[4]。Philosophy もいわゆる哲学のほか、宗教、言語学、文学、政治学、そして現在でいう科学、生物学や工学などが含まれていた。Philosophy は「知を愛する」という言葉通り、学問＝知識について考えることはすべて Philosophy であり、したがって、現在の Science も Engineering も Philosophy の一分野であった。実験を伴う実証が Natural Philosophy として確立して、それを「知識」を表す Science として Philosophy から区別したのが 18 世紀と考えられている。この Science が「科学」[5]と翻訳されたのである。科学を「工学」＝ Engineering と区別するために、Natural Science「自然科学」が使われる。こうした分類は、その時々の利便性に基づくもの、便宜的なものである。

実証性を重視する Science というあり方が学問の方法として承認されると、その

3　イーグルストン（2003）．16-22，バリー（2011）．13-15.
4　イーグルストン（2003）．14.
5　「科学」も漢語として存在する。Science の訳語として使用される以前の漢語の意味は「科挙の学」のこと。

ほかの Philosophy の分野も Science を目指し、Human Science という言葉が成立する。これは人文科学と訳される。文学、言語学、心理学、宗教学、人類学などの総称である。これは「人文学 Humanities」と同じもののようにみえ、時には単なる言いかえとして扱われることもある。しかし、Science という枠組みの有無によって、両者の考え方は異なっている。

3 「二つの文化」論争と学問領域の複合

この違いは、Science が扱う領域が広がり、精密化することで一層大きくなった。技術的な進歩によって自然観察が精密になり、宇宙や物理法則についての知識が深化、拡大すると、Humanities が把握する Philosophy から遠ざかってしまった。これまでの教養としての科学教育のレベルでは、相対性理論はもとより、量子論も、分子生物学も理解できない。そのことが明示化されたのが、1959 年の J.P. スノーによる『二つの文化と科学革命』であるとされる。スノーは、人文学と科学の領域に携わる人々の間の相互理解が成立しなくなっていると警告した。人文学者は科学の知識を持たず、科学者は人文学に関心を持たない[6]。そのことは単に両者の交流を阻害するだけではなく、社会が人文学と科学を活用によって成熟していく上での障害である、ということを指摘したのである。

スノーの警告は広い関心を呼び、人文学と科学の間の相互理解の必要性が議論されることになった。この問題は 50 年以上にわたって繰り返し取り上げられた。更に、人文科学における「科学的言説」の誤用を巡って、1990 年代には「サイエンス・ウォーズ」と呼ばれる論争も引き起こしている。

4 人文主義ということ

人文学を考えるために、Humanities に戻ってみたい。学問領域としての Humanities は、ルネサンス以降に、人間の言語や文化についての関心によって成立した。Humanity つまり「人間」について考えることが Humanism が対象とする領域である。神と神が創造した世界についての学問から、被造物としての人間と人間が生み出したものへ関心がうつったのが Humanism であって、通常は「人文主義」と訳されるが、「人間中心主義」とも訳されるのはそのためである。「人文主義」の実

[6] スノーが人文学と科学の同レベルの知識として挙げたのは、「シェイクスピアの作品のいずれかを読んだことがあるか」と「熱力学の第２法則を知っているか」というものである。

践者である Humanist =「人文主義者」は、神についての学問、神学以外に人間についての学問としてギリシア語とラテン語、それらによって表された哲学や文学を学んだ。神学に対するこれらの知識は、知識人にとって欠くべからざる素養となったのである。これが「人文学」の形成のもとになる。

しかし、この人間中心主義が生み出した学問は、逆説的なことに、人間が世界の中心にあることを許さなかった。地球は宇宙の中心ではなく、太陽を回る惑星の一つとなった。天文学の帰結は、太陽も宇宙の中心ではなく、数多ある恒星の一つに過ぎず、さらに太陽が他の恒星とともに属する銀河系も数多の銀河の一つに過ぎず…と、宇宙における地球の相対的な大きさは小さくなっていく。生物学的にも、神の被造物の中で特別な存在から、地球上で進化してきた種のひとつに位置づけられることになった。

5　人間中心主義の後の人文学

人文学は、人間中心主義が発見した「人間」の諸属性について、あるいはその諸属性が生み出すものについての学問領域である。その結果として人間中心の世界観は失われた。人間は世界の中心ではないが、その分、世界は広がり、不思議に満ちている。そこに現われてくる Humanities は、再び自然科学や社会科学と結びつかなければならないだろう。人文主義（Humanism）の後に来る（Post-）人文学（Humanities）は、人間中心主義ではなく、人間と人間が生み出したものについて考える。1990年代の「サイエンス・ウォーズ」と呼ばれる論争の中で起こった「ソーカル事件」は、安易に自然科学の概念を人文科学の領域で使用することをいさめたが、二つの領域を分断すること自体が意図されているわけではない。人文学を自然科学や工学、社会学と対立するものではなく、「人間の知性」の礎としてとらえなおす必要がある。

参考文献

Cuddon, J.A., *The Penguin Dictionary of Litterary Terms and Literary Theory, Fourth Edition*. Penguin (London), 1998.

イーグルストン、ロバート．川口喬一訳『英文学とは何か　新しい知の構築のために』研究社、2003

井山弘幸・金森　修『現代科学論　科学をとらえ直そう』新曜社、2000

バリー、ピーター．高橋和久訳『文学理論講義　新しいスタンダード』ミネルヴァ書房、2014